



私の3冊

小山哲男

後輩に薦める 2 冊

村上 隆 (著)

芸術起業論 幻冬舎, 2006 年発行

臨床研究を行い、論文として公表することは、広い意味で「表現」です。本書は現代美術の第一人者によるビジネス書。現代美術と研究論文、一見遠く離れた領域に思えます。しかし両者の表現としての方法論は驚くほど似ています。例えば、「美術史の中でどのあたりの芸術が自分の作品と相対化させられるのかをプレゼンテーションすること (本書 p88)」は、文献引用に基づいて、自らの知見を位置付ける研究論文の手法と同じです。著者は東京藝術大学ではじめての日本画での博士号取得者 (本書 p61) だそうです。

西内 啓 (著)

統計学が最強の学問であるーデータ社会を生き抜くための武器と教養

ダイヤモンド社, 2013 年発行

言わずと知れたベストセラー。一般書の形をとっていますが、これは医学書です。例えば、冒頭の具体例が「フラミンガム研究」。臨床統計の経験のある人でも、知識の整理に役立ちます。とくに第5章で、t検定、分散分析、回帰分析、重回帰分析、カイ2乗検定、ロジスティック回帰を「一般化線形モデル」と一括りに理解するところは秀逸です。私たちのリハビリテーション領域で使われそうな統計の基本的な考え方をうまくまとめてくれています。

自分の 1 冊

奥田千恵子 (著)

医薬研究者のための評価スケールの使い方と統計処理

金芳堂, 2007 年発行

リハビリテーション従事者にとって「評価法」は永遠の課題。血液生化学データなど異なり、日常生活動作などは単純な数値化に向いていません。それらをどうにか数値化し、ある程度の再現性をもたせて科学のベースにのせていくことが、この領域の多くの研究者の使命。評価法の信頼性や妥当性、それに基づいてよく使う統計を、基本に立ち返って考える画期的な本です。数回流し読みした後に、エクセルや電卓片手に読み直してみます。なるほど、こんなことだったのか、とわかってきます。この本を片手に、いろんな評価法を再検討するだけで、数回程度の学会発表ができてしまうように思えます。

■こやま・てつお 医師 25 年目 西宮協立脳神経外科病院リハビリテーション科 (兵庫医科大学特別招聘教授)

急性期病院の中央診療科としてのリハビリテーション科に在職しています。中央診療科の特性上、リハビリテーションをうける多くの患者さんの臨床データに接します。それらに基づく観察研究を数多く手がけています。ここでは臨床研究のものの見方、考え方の手法の参考書を取り上げてみました。